



「いのち」

栗東市立治田西小学校 三年 福山 叶翔

ぼくの家はお父さんもお母さんとはたらいているので、夏休み中も毎日学童保育所に行きました。学童保育所ではたくさん外遊びをして、たくさんさんのセミをつかまえてはにがしました。夏休みがおわりに近づくと、地面にしんでいるセミを見ることが多くなりました。

8月26日、いつものように外遊びをしていると、地面にひっくり返っているセミを見つけました。少しさわつたら、足がごそごそと動いたので、生きている、このままでは、アリに食べられるかもしれない、と思つて手にのせました。にげる元気ありませんでした。

お母さんがむかえに来た時、このセミ、もうすぐしにそうやねん、このままやつたら、アリに食べられるかもしれへん、かわいそうやし、家にもつて帰つてもいいい、とききました。お母さんは、セミは自然の中で生きているから、最ごも自然の中でしぬほうがいいよと言いました。ぼくは、なつとくできなかつたけど、お母さんにそう言われてセミを木におきにいきしました。でも、どうしてもそのセミが気になつてはなれられませんでした。お母さんが、そのセミを

家につれて帰るのが本当にいいと思うなら持つて帰つていいよ、と言いました。でも、ぼくは最初に言われたことがどうしてもひつかかり、ぼくもセミは自然の中のほうがいいのではないかと思ひました。そして、お母さんが、近くの神社につれて行ってあげたらどうか、そこならたくさんさんの仲まがいて、人にふまれることもないよと教えてくれました。ぼくもそれがいいと思ひ、セミを神社につれていき、仲まがたくさんいる安全そうな木にセミをおきました。それから、お母さんにお金をもらつて、おさいせんを入れ、セミができるだけ長生きしますように、お願ひしました。ぼくは、生まれただけ所でおだやかに命が終わることがセミにとつて幸せなんだと思ひました。

講評

地面にひっくり返っているセミを見つけ、家を持つて帰ろうとする。しかし、「自然の中で生きてきたセミにとつて、最期も自然の中で死ぬ方がよい」という母親の言葉をきつかけに、セミにとつての一番良い最期の場所を考える。そして、母親と相談しながら、安全で仲間が多い神社の木をセミの最期の場所として選び、お賽銭をあげてセミの長生きをお願ひする。生き物を大切に思う優しさと、母親との豊かなやり取りが、子どもらしく素直に描かれている。

